

# 出生前診断についての考え方

1年 伊藤 晴加

出生前診断とは、羊水穿刺や超音波検査などによって、生まれる前に赤ちゃんの病気や奇形の有無を診断することである。2013年から始まった新出生前診断は、採血だけで胎児のDNAを高確率で検出できる。出生前診断は長い間議論が交わされている。賛成派は、病気を持つ子供が生まれたときに経済面の事情もあり、育てていくことができないこともありうると主張しているが、反対派は染色体に異常があり中絶を選ぶことは命の選別であると批判している。また、科学技術の進展を止めることができない現代だからこそ、新出生前診断は特に活発に議論がされている。私は出生前診断を行うことに賛成だ。

第一に胎児の病気を早期治療できる可能性があることが挙げられる。染色体異常にも治療可能な先天異常である場合があり、出生前診断により早く見つけることで完治することもある。かつては早期治療につながるとはいえ、母胎に負担がかかったり流産のリスクが高かったりと診断には様々なデメリットがあったが、現在は採血のみで約99%も正確に検出することができる。もし出生前診断を受けずに、早期に発見していれば完治していたかもしれない罹患した子供が生まれてきた場合、母親としてこれほど後悔することはないだろう。

第二に母親の心の準備の問題がある。病気の有無に関わらず子供を産みたいと思っている母親にとって出産する前に子供が病気であるかを知っておくことは非常に大切だ。生まれた後に子に異常があるとわかったときに衝撃が大きいからである。私の友達でも障害を抱えた人がいるが、その母親は出産前に子が異常をもっていることを知ったため負担が軽減されたようだ。さらに、出産前に子供の病気を知ることで、共にその子供と生きていく決断をした親であれば子を産む前に障害がある子供用の環境をつくるなどの準備ができるメリットもある。確かに出生前診断によって中絶を決めることは命の選別と言えるかもしれない。染色体異常が確認された子供を持つ親が中絶を選ぶ確率は高いというデータも出ている。しかし、私は中絶を選ぶことが必ずしも命の選別であるとは思わない。家庭ごとに経済面などの環境は違うため、もし産んだとしても障害をもつ子供を養っていくだけのお金がない場合もある。実際にお金がなくて養えないよりは中絶を選んだほうがいいだろうと子供のことを考えて決断する親は多いらしい。私はこのような判断に到った親を命の選別をした親ではなく、むしろ全ての命が平等であることを理解しているからこそ中絶を選んだ親だと考えている。

第三に日本の生死の分かれ目についての考え方が挙げられる。日本では着床してから呼吸が止まるまでを生存と定義しているが、米国では出産した後を生存と定義していて、呼吸が止まった後も人として扱われる。どちらが正しいとは一概には言えないが、この定義も日本で出生前診断の批判がやまない原因だと思う。米国では受精卵を他の子供の命のために実験材料として用いられることさえある。日本では中絶と決まると受精卵は死んでしまい、実験には使用せずに一人の人として生涯を終える。このような考え方の違いもあり既に米国では出生前診断が法律で認められている。日本の生死の定義は米国と違うと批判

する声もあるが、子供のことを考えて中絶を選ぶ場合もある。

私は、出生前診断が命の選別になり得る可能性があることよりも前述した三つのメリットの方が大きいと思っている。